

# 多文化社会における子どもの移動とアイデンティティの再構築

## 一日韓国結婚家庭に育った大学生のライフストーリーから

梁正善 早稲田大学日米研究所 招聘研究員

本研究は、日韓国結婚家庭で育ったJ氏のライフストーリーを通じて、「移動する子ども」が経験する言語的・文化的変容とアイデンティティの再構築プロセスを明らかにすることを目的とする。

川上郁雄（2013, 2014）は「移動する子ども」のことばと記憶の力に注目し、移動が単なる地理的経験でなく、自己語りや言語実践に強く結びついていることを示した。さらに、川上（2021）は『「移動する子ども」学』において、感情・感覚・情念に揺れる語りを読み解く重要性を述べ、移動とことば（2018, 2022）では、制度・社会における名前・言語の選択がアイデンティティ構築においていかに困難と意味を孕むかを示している。本研究では、これらの視点を援用し、J氏の語りを再構成する。

J氏の語りからは、①韓国での安定した生活と日本文化への断片的接触、②日本移住後の言語的・心理的困難と適応過程、③学習面での努力と進学、④名前の使い分けを通じた自己認識の揺れ、⑤国籍選択という決断を通じた自己確立が読み取れる。とくに「韓国語が消えていく不安」と「日本語が自己を定義する手段へと変わる過程」は、移動の中で形成される言語的アイデンティティの揺れと再構築を象徴している。

分析の結果、J氏は言語的境界における葛藤を通じて「多文化的自己」を形成しており、名前の使い分けや日本語習得といった言語的实践は、自己認識と他者からの認識の狭間で構築される動的なアイデンティティと深く関係していた。特に、日本社会への適応と所属意識の形成には、公式文書や制度的手続きにおける「名乗り」の経験が決定的な役割を果たしていた。

本研究は、「移動する子ども」の語りを通じて、教育現場における包摂的实践の必要性や制度的配慮の課題を浮き彫りにするとともに、多文化社会におけるアイデンティティの再構築がどのように進行するかを示した。今後は、より多様な事例との比較分析を通じて、「移動」と「ことば」、「記憶」と「制度」の交差点における実践的知見を深めることが求められる。